

# 台湾の「環保祭祀」と民俗宗教―寺廟編

Eco-worship and Folk Religion in Taiwan

藤崎 康彦  
FUJISAKI Yasuhiko

## 要約

台湾では今世紀初め、あるいは前世紀末頃から、政府の施策で大気汚染防止を目的に、寺廟での参詣に際し、香を点し金紙を焼く量を減らす「環保祭祀」が行政主導で推進されている。二〇一七年夏には、これに疑念を呈する寺廟のグループが台北で集会をし、SNSでの情報が拡散していたので、多くの参加者を集め、メディアも注目することとなった。日本でもそれが報じられ、筆者も知るところとなった。

筆者は台湾の寺廟でシャーマンの儀礼などを過去において観察していたので、環保祭祀などが寺廟と信者に及ぼす影響に改めて興味を抱いた。本稿は二〇一八年三月と九月に訪台し、寺廟を訪ねて、観察したときの記録に基づき、寺廟での実際の様子を記述したものである。廟での様々な儀礼の実践と、信者の行動についての記述は、本稿の続編に収め、本稿は事実の確認に徹して記述

をした。

## 一、始めに

筆者は二〇一八年に二回台湾を訪れ、それぞれ十一日間であったが、現地調査を行うことができた。一回目は三月(二〇一七年度)、二回目は九月(二〇一八年度)であった。

出張目的は台湾の民間(民俗)信仰に関する、およそ過去三〇年間に  
おける変化の有無、その様相の観察である。筆者は一九八八年までは、  
比較的頻繁に訪台し、童乩(台湾語では「タンキイ」あるいは「タンキー」  
という)などシャーマンの職能者の観察を、寺廟を中心に行っていた<sup>1)</sup>。  
しかしその後今日まで三〇年ほど台湾を訪れることはなかった。この度

再び訪れようと思ったきっかけは、ある報道に（間接的に）接したことである。二〇一七年の夏頃、台湾の寺廟において金紙などを焼くことを政府が禁じたために、社会的混乱が生じているとの話題が、日本のメディアで報じられたのである。

実際は、これからの記述で紹介、議論するが、報道されたことと筆者が思ったことと事実とはかなり異なっていた。筆者の早計な理解は不正確であった。この年以前から既に、金紙などの紙類、線香の使用を寺廟においても家庭においても減少させるための政府の通達は存在していたのである。大気汚染防止などの環境保護が目的である。玉置（二〇一八）によれば、指導に協力する寺廟のある一方で、それに反発する所も少なからず存在していたようだ。二〇一七年七月、台北で、寺廟の管理や民衆の信仰の表現についての政府施策に、不満の意を表明するパレードと集会を、一部の寺廟が組織した。台湾で人々の注目を集める話題であり、台湾メディアは大きく報道した。それが日本でも紹介され、筆者も知るところとなったようだ。それらの経緯は玉置（前掲論文）の記述に基づき、後ほど改めて整理するが、とにかくこのニュースなどが、筆者の台湾と寺廟への関心を再びかき立てたのである。

## 二、問題設定

筆者の問題意識は次のようなものだ。台湾の一般民衆の日常生活、精神的生活にとって、神々の存在はとても大きい。寺廟は神々と人々が交流（コミュニケーション）する場であるからだ。交流の方法は様々にあ

る。これについては後の各論で述べる。そこにおいて、線香と金紙などの紙類及び簞（台湾語では「ポエ」と読む、日本語では「こう」という託宣の道具は必須の品物である。神々と交流する際のツールと見なせるものに（ここではさしあたり簞は別にして）何らかの制約を加えることは、信仰に関わる行動と意識に、幾分なりとも影響があるのではないかと。更に、その制約が受容されているにしろ、抵抗を引き起こしているにしろ、社会の変化がその背景に存在すると想定されるのではないかと。寺廟と信者、人々と神々の関係に何らかの変化が生じているのであれば、それはどのようなものであるか。これらの関連した事柄を知りたいと思ったのである。

しかし先ず以て、「環保祭祀」（金紙の焼却や香を焚くことを減少させ、大気汚染防止に配慮する祭祀のあり方を指す表現。公式に政府やメディアなども使っている）はどのようなものなのか。金爐や香爐はどのようなになっているのか。実際に観察してみれば、なるほどと思うような変化に気が付くかも知れない。あるいは、祭祀のあり方として根本的には何も変化はないと判断できるかも知れない。いずれにせよ直接観察してみることが必要だと感じたのである。従って、先ず実地調査報告、次にその考察、の二段構えで論述を進めたい。本稿は基本的に寺廟の、及び信者の側の、金紙や香の扱い方やそれへの態度の観察報告となる。本誌に投稿するに際して、見聞した寺廟の情報量は、所定の紙幅に収まらない恐れがあるので、本稿は「調査報告その一 寺廟編」と理解しておきたい。寺廟で行われている儀礼やその他呪術的なものも含む活動の報告は、

これに続く論考（『人文学フォーラム』第十七号、跡見学園女子大学人文学科、二〇一九年三月刊行予定）に収めたい。

### 三、環保祭祀

具体的な観察と考察に入る前に、今回の研究のきっかけとなった、報道（むしろ社会的問題）の背景をまとめておきたい。

寺廟での拝拝（「バイバイ」と読む。神明に札拝、祈願などすること（をいう）の際、線香や金紙（金紙など紙類については次の項で説明する）をなぜ減らす必要があると行政府はいうのか。それは香を点すことも金紙を焼くことも煙を出し、大気汚染を引き起こすとされているからである。しかし、この主張に対しては、科学的に根拠が薄弱であるとか、他の汚染源（例えば自動車やバイクなどの排気ガス）に比して深刻さはさほどでもないとかの批判はある。さらに、行政府の、拝拝に際して香や金紙を減らすようにとの指導（「減香、減金（金紙の略である）」。これをまとめて「環保祭祀」と通常はいうようだ）自体は二〇一七年に急に始まったものではない。玉置（以下、玉置への言及は全て前掲論文による）によれば二〇〇〇年からのことである。それがなぜ二〇一七年に大きな社会的問題になったのか。

これを玉置の分析に従って私なりにまとめれば次のように理解できる。すなわち先に述べた「二〇一七年七月、台北で、寺廟の管理や民衆の信仰の表現についての政府施策に、不満の意を表明するパレードと集会」が行われたのは、二つの異なる契機がこのときに共に顕在化したこと

とよって相乗的に生じたものである。

一つは環境保護政策からのものである。「減香、減金」の環保祭祀の推進者は、行政府や各地方自治体の環境保護局である。「減香」とは、通常は一神明に対して三本の線香を点してお参りするところを一本にすることを意味する。「減金」とは焼くべき金紙の絶対量を減らすことを狭義には意味するのだが、実際の観察をし、関連の情報も集めてみると、広義の方策ともいえるべきものも示唆されている。それらも包摂することができるかも知れない。例えば、玉置も指摘している、金紙の代わりに米（「平安米」と名付けられた少量の米の入ったビニール袋）を奉納することもそうである。加えて筆者の見聞した範囲では、良質の金紙で煤煙を余り出さず、金爐も痛めないものを使うとか、さらには金紙の金額を大きく表示して紙の量を減らすとかも「減金」に含めることができる。なぜなら、金紙の束は、実生活の金銭になぞらえられているので、一束の金額を大きく設定すれば、少ない金紙で信者が望む金額を神に奉納できる理屈になるからだ。また、玉置の指摘によれば、廟ごとに個別に金紙を焼くのではなく、行政が管理する焼却炉で他の廃棄物と一緒に焼却することも、環保行政の側では推進したいようである。ここまで来ると必ずしも「減金」の概念に当てはまるか分からないが、大気中の排出物を管理する観点からなのである。当然、神明への神聖な供物を一般家庭ゴミなどと一緒に焼却することには、民衆の側では抵抗はあるようだ。

もう一つは、本稿の主題とは直接関係しない、宗教団体の管理の観点

からのものである。複雑な経緯から、現在のところ、宗教団体関連行政の担当部局とその根拠法が単一ではない。それに応じて寺廟の「団体」あるいは組織としての性格（例えば法人格など）も同じではない。そのため玉置によれば政府が「宗教団体法」ともいべきものの法制化を目指そうとしているとのことである。玉置は、宗教団体の法人化を促し、財務の透明化を図ろうとするものであるとしている。しかしこれを通じて政府は宗教団体への規制を強め、極端に言えば寺廟の活動の弾圧を図っているとの危惧の念が、一部の寺廟関係者においてであれ、生じたようである。

つまり、「環保祭祀」は人々の宗教活動の抑圧であり、「宗教団体法」は憲法の保障する宗教の自由に対する侵害である、との言説が時期を同じくしてインターネット上のソーシャルメディアで拡散した、と玉置はいう。それによって、抗議運動の呼びかけや、運動の組織化も生じ、それを現地マスメディアが取り上げた。台湾での社会的な関心と呼び、事が大きくなってしまった。これが真相に近いようであるのだが、あたかも二つの抵抗運動が連携して生じたかの如くに、一般には受け取られてしまった、と玉置は見る。そしてそれらの報道により、外国の我々も知るところとなったのである。

なぜそこまで人々の関心が高まったのか。これに対する玉置の議論の主旨（それはまた玉置の論文の主要部分でもある）は次の如くである。すなわち、この二つの抵抗運動は「台湾人」としてのアイデンティティ確立の志向性に関連していること、それが拡散して盛り上がったのは

ソーシャルメディアの力が大きかったこと、の指摘が一つである。そしてさらに前者については、若い人々に「本土意識」が高まり、歴代国民党政権によってないがしろにされてきた、台湾独自の宗教慣行などを再認識し、「台湾人」アイデンティティを高める、そういう動きがその背景にあるという指摘がもう一つある。この二つの分析を前提にして、今後の台湾社会のあり方を考察することを玉置は意図していると思われる。

以上紹介した、環保祭祀などの背景や台湾社会の志向性の玉置の分析は説得的であると筆者は評価する。しかし、筆者の関心は玉置と異なり、より現象的なことである。つまり「環保祭祀」により、市井の人々は（神明や寺廟に対して、具体的に）どのような行動をとっているのか、筆者がかつて見慣れていた寺廟の光景には何らか変化が生じているのであるか、生じているとしたらそこにはどのような価値観の変化が伴っているのか、などである。換言すれば、金紙や線香に関わる騒ぎの報道の背景を玉置に依って理解した上で、その実際を三〇年前と比較しながら観察し、考えてみる事が本稿の目的である。

#### 四、金紙など紙類と線香

環保祭祀に関わる金紙や香の様相を、具体的に個々の廟ごとに記述してゆく前に、やはり読者が全て台湾の宗教事情に知識があるわけではないことを考え、準備として金紙などと香について、少し紹介しておきたい。

これまで断片的に記したように参詣者、信者は線香を何本か点して、神像の前に進み、神に祈る。線香はこれまでは一神明に対して三本が普通のようだ。環保祭祀の場合には、行政側としては一本とするよう推奨しているが、必ずしもそうはしない寺廟もあるようだ。それと共に、金紙といわれる黄色の紙束と、場合によっては菓子、果物その他の供物を、神像の前の桌に供えることもある。

この金紙は、拝拝が終わると桌から下げ、金爐に投入する。金紙は煙となって、天に昇ってゆくと言うことができる。金紙には形、大きさ、絵柄など様々な種類があつて、どの場合にどれを用いるのかなど、このことは筆者には説明できない（多分台湾でも普通の人には分からない）。ただ、金紙は人の世界でのお金と同じような、神明の世界でのお金と（漠然と）観念されていることは間違いないようだ。

更にまた、台湾の人々の信仰生活において重要な紙製品には、金紙と対になる銀紙がある。これは、普通は神明を祀っている廟では用いない。銀紙は死者（亡者、死者のことは鬼ともいう。殊に祀るべき子孫の居ない死霊を「孤鬼」という）に関したことに用いる。周知の如く中国の宇宙観では事象を陰と陽に分ける。生者や神明は陽であり陽間に属し、死者は陰で陰間に属する。これとの関係で金紙は陽に用い、銀紙は陰の世界に属する。しかし、寺廟でも祭祀によつては銀紙を用いるらしいが、詳細は筆者は理解していない。後に述べる台北の城隍廟には銀紙を焼く銀亭があり、廟内でも銀紙を売っていた。金亭には、銀紙は反対側にある銀亭で焼くようにとの注意書きもあるが、うっかりして銀亭の存在は

確認していない。

金紙が神明に対してどのような意味を持つのか、明確に説明した資料を、不明にして承知していない。管見の及ぶ限り金紙を含む紙製品に関して、実体験も交えて多面的に考察を加えた論文が蘇（一九九九）である。蘇においても金紙については実は十分に得心のいく説明はない

蘇は金紙・銀紙を含む宗教儀礼に用いる「紙製品」を論じていて、その個人的体験から銀紙の方を詳細に論じている。筆者もこれまでの台湾で見聞して来たことから、銀紙についてはほぼ「定説」あるいは「常識」としてよいだろう事柄は承知している。以上のような事情から、論述の都合上先ず銀紙を先に取り上げ、そこから翻つて、金紙の意味を推し量りたい。

### 1、銀紙

台湾では、死者については生者とは別な世界（陰間）において、しかし生者と全く同じあり方の生活を送っていると一般に信じられている。生者と同じように死者も様々な生活資材を必要としている。住宅に始まり家具什器、衣類、食べ物、つまり衣食住全て同じようにして暮らしている。それらを遺族、子孫たちが祖先供養として、死者の世界でのお金とされる銀紙の他、具体的な物品を紙製品として調整したもの（紙に絵として印刷した程度のものから、立体的に家屋の形などに組み立てたものまで多岐に亘る）を用意して供える。従つて、銀紙については陰間の通貨であり、孝養の目的で用いられると一般に信じられていると考えて

よい。しかし、この他に孤鬼への慰撫などを目的とした使用も重要なものとしてある。この呪術的な使用については、筆者がもし銀紙を所持していたとしたら使っていたらという経験は、三〇年以上前のことであるが、している。その時の経験を述べて、いくらかでも呪術的使用の場面など実感してもらおう一助としたい。

台湾中部に「梨山」という恐らく夏でも涼やかな美しい山がある。当時は台中縣であったが、現在は台中市に属しているようだ。筆者は旧台中市内からバスで登った。山頂へは細い道が山腹にへばりつくように、一本らせん状に山肌を走っている。そこをがたがたと軋む旧型の路線バス、もしくは乗用車などで登るのである。狭い道は、片側は道を切り出したときのままのむき出しの岩肌が眼前に迫り、もう一方は底なしに見える断崖絶壁である。道幅は狭く登りの角度は険しく、曲がりも急である。従って、カーブでの見通しは上り下りどちらからでも悪い。崖側にガードレールなどはなく、カーブでミラーなどもない。更に台湾のバス運転手の常として、この様な道でも平坦な道を飛ばしているかの如くの走り方をする。筆者は山腹側ではなく、崖下を見る側に席を取らざるを得なかった。先客に山側の席を占領されていたからである。筆者の側からの光景は深い谷である。タイヤは道路上に乗ってはいいるが、カーブでは車体は道路からはみ出す。眼下を見ると宙に浮いているような感じを味わう。こんな状態で頂上まで運ばれたのである。大袈裟な言い方ではあるが、筆者のそれまでの人生で、「生きた心地」がしなかったのはこの時であった。

後から台湾の研究指導者たちにこの話をすると、更に肝が冷えた。上り下りの車両がすれ違うとき、しばしば衝突なり接触なりをすることがある。あるいは単独で走っていて、道から外れてしまうこともある。いずれにしても深い谷の底に落下し、樹林に沈んでしまうことは、まれならず生じているようだ。縣なりの行政部局が時折谷底を搜索する（というより浚う）と、壊れた車両と白骨が（沢山）見つかるのだそうである。

この場合の死者は行方不明者であるので、見つけ出されるまでは祀る人はいない「孤鬼」である。孤鬼は生者に災いをなす存在である。それ故に中元節には「普度」を行い、孤鬼を慰撫するのである。崖下に転落することは孤鬼によるものと考えて、路線バスの乗客たちは銀紙を窓から撒いて、谷底に引つ張り込まないでくれと死霊たちに願うのだそうである。これを聞いたとき、筆者自身が味わった恐怖が真にリアルに蘇ってきて、銀紙の呪術的意味が納得できた。悪霊をお金で慰撫する、あるいは目眩ましとするような意味が明瞭なのである。

この様に、祖先に対する孝養と、邪悪な霊を払うことの、二つの目的あるいは使用法が銀紙について了解できる。では金紙はどのような目的を以て神明に大量に奉納され、燃やされているのだろうか。

中国文化の神々は、高度に人格化されている。元来人であった存在が神格化されて祀られている例が多い。人々にとって、神々との関係は、畏怖の念に基づくというより、何らかの互酬性に基づくもののように思われる。人の側には功利的な心性がある。個々の神々への信仰の強さは、それら神々が得ている人気とも言い換えることが可能なものだ。人の役



写真一

に立たないというか、日本人の感覚だと御利益がない神からは、信者は離れる。神々へは様々な祈願をする。願うことは我々日本人と変わらず、商売・事業の成功、家内の無病・息災、病氣平癒、学業成就(受験合格)、旅中の無事・平安などなどである。日本とは祈願する神様が違うだけであらう。ただ、日本の神様との関係と少し違うところは、具体的な様々なことを神に尋ね、答えを託宣として求めることを日常的に行うことである。その方法の一つが神籤である。日本でも初詣の際には神社で「おみくじ」を引く。しかし、台湾の場合は籤に対する真剣さと入念さが違う。また個別具体的なことを「筭」という道具(方法としては擲筭とか

擲筭と言るのが普通である)を用いて、神の答えなり指示なりを求めることも日常的によく行う。神には問いかけではなく、願い事もする。願ってそれが叶ったり、神の指示を得てそれに従ってよい結果が出たりすれば、人は神に再び詣ってお礼をする。尋ねるか願うか奉謝するか動機は違うであれ、参詣すれば線

香を点し、供物を捧げる。供えるものの中に金紙は必ずある。

神々とのこの様なコミュニケーションに関し、三月の訪台時に台北の龍山寺で興味深い事例を経験した。本殿に出入りする石段(右と左に二つある。本殿から見て左から上がり、右から下りる)の右側の石段脇にきれいにアレンジした高さ三〇から四〇センチくらいの花籠が二つ置いてあった(写真一)。それぞれ別の人の名札が立てられていて、異なる人が奉納したものである。ちょうど日本からの観光団を案内していた男性ガイドが、その花籠に一行の注意を向けさせて、説明していたのが聞こえてきた。それに依れば、神に何か願って叶ったときのお札に、この様な花籠を奉納するのだそうである。多くは花屋に頼んで用意させるが、自分で調製しても差し支えない。しかしこれまでも普通はお札の参詣時には金紙を焼くものではなかったかと疑問は感じた。

この話を立ち聞きして、これまでの記憶を探してみたが、それに相当するものは思い当たらない。その時は新しい習慣なのかと思ひ、他の廟でも注意して観察してみよう程度にしか、気にしていなかった。それより、廟の内を注意してみて、また外の塀の周りも歩いてみて、金爐を見るところか、それらしきものの煙突を塀の外から望見することすらできなかった。そのことを訝しく思った。龍山寺の金爐と香爐については訪問した寺廟の各論的な報告で再論するので、ここでは触れないこととする。

しかし九月の訪台時に、金紙に代えてお米(平安米というようだ)を奉納して煤煙を減らそうと呼びかける張り紙などを廟で見かけたりし

て、先の花籠も金紙と関連づけて意味が理解できた。以下に、神に金紙の形態をとる「お金」をなぜ煙にして届けるのか、筆者の理解を述べたい。

## 2、金紙

なぜ金紙を煙にして空に登らせるのかを考え始めたとき、連想的に思い浮かんだ事は以前に読んだ、南米のシャーマン研究の本であった<sup>2)</sup>。中南米での先住民によるタバコの使用はよく知られているが、嗜好品としての消費と共に、宗教的な観念も存在していた。それに依ればタバコは神の食べ物なのであり、煙として天に届けることで、神に食べ物を供給することができると考えられていた。更にまた、煙を吹かすと神はその誘惑に負けて、人間の願いを聞いてくれると考えるのである。

台湾に話を戻すと、金紙を焼くことは神にお金を煙の形で届ける象徴的な（比喩的な）方法なのであると理解できる。それはよいとして、台湾の神々は（人間の死者と同じように）お金を必要としているのであるか。これについて蘇は次のようにいう。

「中国人は、陰間も陽間と同じように物質生活、経済生活を営むと考えており、死者が陰間でよく暮らせるように紙製品を送るのである。また庶民は、色々な目的を実現する時に金銭が重要だと痛感しているので、大量の金紙銀紙を、神や死者に送る必要性を考えている……」（蘇・九一）

この引用に含まれる二文に関して、前の一文は既に我々の了解するところであろう。後の一文に関しては、蘇は次のような説明をこの前で示している。先ず台湾語の諺の中にはお金に関するものが少なくないとする。それらが示すことは、「お金」の多寡によって、社会的地位がどのようにでも変化するということである。例として「お金があれば、鬼に白を推してもらえない。懐の中にお金があれば神様に掃除してもらえない」という意味の諺や、「金さえあれば命までも買い戻せる。」の意の諺を明示し、「金銭万能の考え方がある。こうした考え方が、紙銭を焼く習俗の背後にあることは間違いない」（同書・八九）とする。つまり、神すらお金で操ることができるといふ功利的な感覚があると理解すべき指摘をしている。

蘇は更に、自らの研究の今後の課題として日本との比較をあげている。一例として、日本の賽銭と台湾の紙銭の違いに触れ、賽銭は神社に上げる（奉納する）もので、直接神々が使用するものではないが、「金紙銀紙は、陰間に送られ、神仏または靈魂の財貨となつて使用される」という大きな区別がある、と日台の研究者も参照してまとめている。（同書・九一）

以上の如く、金紙を焼くのは対象とする神明に（煙として）直接届ける行為であると結論して間違いはない。しかし、金銭を奉納する理由は神明の側の事情とは考えにくい。死者たちと異なり、神明も人同様の生活をするために金銭を必要としているわけではないだろう。人間の側が金銭（金紙）によって（を通じて）神明に影響を及ぼそうとする行為で



あろう。祈願をし、神にそれを実現してもらおう。幸いにして叶ったときにはお札の拝拝をする。そのどちらにおいても金紙が人の世界の贈り物（あるいはむしろ賄賂）として、金爐に投入されるのである。

この様な見方は、台湾民衆を余りに功利的態度の持ち主として描き過ぎていると感じるかも知れない。しかし、そこには人々の神明への敬虔の念や、幾分の親しみの念も確かに伴っているのである。蘇が彼女の論文のまとめで示したエピソードを紹介すれば、十分に我々にも了解できるであろう。

蘇は、一九九七年に台湾南部の中都市である屏東の媽祖廟において、二人の若い女性が金爐に金紙を投入しているのを見た。二人の女性は駅近くの銀行に勤めている同僚同士とのことで、蘇は来廟の目的を訊ねた。彼女らの言を蘇が括弧でくくって記しているのをそのまま引用する。

「特定の目的はないが、平安を祈るだけ。また、一日仕事が終わって、女性同士でワインドロー・ショッピングよりは、廟に来て神様にお香りをあげ、紙銭を燃やす方がストレスを解消できるし、友達同士の仲が深くなると思っています」という（蘇・九二）。

蘇は更に、「なぜ神様に紙銭を燃やさなければならぬのか」と聞いてみたところ、理由の一つとして、「神様がよい生活を送れるように」、「もう一つは「神様に恩返し」との返事であった（同書・同箇所）。これを蘇は、「要するに彼女たちが廟に来るのは特定な目的がないが、精神

的には必要としている。『神様がよい生活を送れるように』にすることはいうことは、神様すらも人からの送金によってよりよい生活ができるようになるという人間中心的な考え方であると言える」（同書・同箇所）とまとめている。

蘇が記しているこのエピソードは、今回の筆者の観察からも、その雰囲気がとても明瞭に感じられる。これは約二〇年前のことだが、その頃も神々と廟に対する気軽な身近さは、現在と同様に存在していたことが分かる。現在は、どうかという点についての筆者の観察と感想は、後に改めて述べたい。

### 3、香

環保祭祀の点では、香も減量の対象として問題視されている。これまでに参照した玉置も蘇も香については余り触れていないので、筆者の見解を簡単に述べておきたい。

大気汚染の観点から、香が問題になるとすると、取り上げられている論点は、主に次の点だ。狭い廟の空間で沢山の香を焚くと、香の成分・品質にも依るようだが、汚染物質の濃度は高まる。線香を上げて折つていずれ去る参詣者よりも、むしろ寺廟で働く人が常に漂っている香の煙によって、健康被害を受ける。そういう観点から進んで減香に取り組んだ廟もある（玉置・前掲書）。後に述べるが、台北の行天宮が代表例である。

しかし、寺廟に香は欠かせないだろうと感じる。筆者の知識や経験の

範囲では、空間を浄化・聖化して日常空間とは異なるものにする意味が先ずあげられる<sup>③</sup>。神像の前で香を焚くことは、人から神への何らかの挨拶に相当する儀礼的行為とも考えられる。日本でも仏教信者の家庭では、線香を上げ、お鈴（おりん）を叩いて鳴らし、しかる後に手を合わせる。また、香は精神の沈静化などの効果も（アロマテラピーを例に持ち出すまでもなく）昔から知られている。精神に作用する効果が何らかあるなら、非日常的な状態で神と接触するためにも必要であろうと考えられる。その典型例が童乩である。

童乩は廟以外の場面でも活動はするが、「問神」と言われている託宣などは、基本的に廟の神像の前で行う。童乩が神に変容するときには先ず、両手で持てるくらいの香爐に沢山の香を焚き、その煙を嗅ぐ。あるいは周りのものが嗅がせる。これはかなり強烈な刺激である。それによって、意識の変容状態に導入されるのである。

勿論祭礼や儀礼の場合などは、刺激は太鼓や鐘や銅鑼、角笛、リズムカルに呪文を唱える声、唱経の声、参加者が作り出す、ほとんど堂内一杯に満ち、身体を包み込むような感じの騒音なども、刺激として働く<sup>④</sup>。童乩自身のリズムカルな身体運動も関与する。しかし、童乩の意識変容への導入の基本は、香の煙と匂いが立ちこめる堂内で、神像の前に静かに座り、目をつぶっていることである。

この様に香は、寺廟などの聖なる空間には、それを非日常的な空間とするための必須の道具、というより設備、と考えることができる。それを信者個々人の拝拝の場面でのみ必要なものとするのは、寺廟という空

間の本質の観点から見たとき、違和感を抱く人がいてもおかしくはないと感じる。

## 五、寺廟観察各論

筆者の発端の問題意識からすれば、各地及び様々な寺廟での、金紙と金爐及び香と香爐についての寺廟の対応や信者の行動を、先ず観察・記述して資料として提示すべきであろう。以下、寺廟各論として、記述したい。

### 1、台北市中正区「城隍廟」

正式には財団法人台北市台湾省城隍廟というらしい。台北駅に近い台北市中心部の市街地の中に、他の建物と密接して並んで、道路にすぐ面してある。廟の建物の規模でいえば中規模というよりむしろ小規模な廟である。何より敷地が、建物以外の部分がないことから分かるように、一般の商業ビル並みに狭い。

門を入るとそのまま堂の広間になり、その奥に神殿がある。神殿の左手に二層の塔を模した形の金爐がある。つまり廟の建物内に爐が設置されていることになる。

直径は恐らく三米程度の六角形（もしくは八角形。室内で爐の後ろに回り込むことが難しいので、正確には分からない）の形で、一部タイル貼りのコンクリート製の壁面で構成されている。壁面は畳一枚分くらい大ききで、そこに鉄の観音開きの扉の付いた穴が空いている。少なく

とも隣り合う二つの壁面に扉は付いていた。三月の訪問時は、爐の壁面に「環境問題によって、金紙を焼却することは不都合（迷惑）である

（参詣者が金紙をここに）捨てる（放置してゆく）ことは許されない。」

という趣旨の張り紙がしてあった。爐の扉は閉じられ、南京錠が付いていた。しかし、しばらくすると扉は開けられ、廟閔係の男と思われる人が、段ボールと金網の籠に一杯の金紙を次々爐の炎に投入していた。他のところの觀察に気をとられていたので、いつ始めたのか分からなかった。定時に廟では焼却するとの張り紙は小さくあるが、何時かとは書いていない。この様子で判断すると、割と頻繁に扉を開いて投入しているようで、要は金爐の扉を開放状態にして来訪者が勝手に投入することをさせない点に、爐の運用の主眼があるようだ。

金爐の二階屋根には丸い団子を重ねたような裝飾が廟の天井まで届いている。その中を煙突が走っているのだろう。廟の中からではその先がどうなっているのか分からない。外に出てみても、狭い車道を挟んで対面の歩道と店舗などがあるので、廟の屋根まではよく分からない。幸い対面の店舗は歴史の古い洋菓子とパンの店であり、その店の二階は喫茶店になっている。喫茶店に入ると窓から廟の屋根の様子が分かる。銀色の太いパイプが高く複雑に伸びて、廟の後に向かっていく。後に色々調べた「環保金爐」の煙突であると、この稿を書いている現時点では判断できる。ただ、建物が密集している地域なので、後ろに回ることができず、詳細は分からない。

香についていえば、廟で祀っている神明ごとに香一本ずつと明示した

表示が出ていた。但し、来廟者は必ずしもそれに従っているとも思えない。広間の真ん中に香爐があるが、そこには沢山の香が挿されてかなり煙も感じられた。

この廟には九月訪台時にも訪れたが、廟内の金爐は使用を全く廃止した可能性がある。その代り「平安米投入口 平安米愛心捐贈所」「紙銭投入口 紙銭集中焼放置所」と表示した二つの箱がそれぞれ金爐前に置いてある。要するに平安米を善意で（好意で）寄附する場所（箱）、紙銭を集中焼却するために置く場所（箱）の意であることは筆者にも容易に分かる。金紙は廃止していないにしても、紙ではなく米に代える要請である。これだけ密集した市内にあると政府指導は無視できないであろう。香については何も新たな動きはないようだ。

## 2、台北市万華区「龍山寺」

正式には艋舺龍山寺。ここは、減金・減香の観点からは積極的な取り組みをしており、筆者としては特に論じることはない。玉置に依れば二〇一七年六月には廟内の香爐を一つに減らした。元は祭祀する神明に合わせて香爐は七つあったのだが、二〇一五年にはそれを三つに減らし、「線香の販売を中止し、国家基準に合致した安全な線香を無料で提供する」ことと、二〇一七年にはそれを「一本に限る」ことを、それぞれの年に決定した（玉置前掲論文…三七）。

玉置は触れていないが、金爐については一九九八年から廟で焼くのを止め、二〇〇〇年からは市の「集中焚燒金銀紙銭」政策に協力して爐を

封鎖したそうである。二〇〇八年の報道ではまだ敷地の南西角と思われるところに金爐はあったが、今はない。その撤去はいつなのかは、資料調べでも分からなかった。先に触れたように金紙の代わりに奉謝の意で花籠を供えるなどの斬新な試みが龍山寺で見られることは興味深い。

### 3、台北市信義区 「松山慈惠堂」

松山慈惠堂には九月に二日にわたり訪れて、観察とインタビューを行った。目的は「扶鸞（「フウラン」、あるいは短く、「フラン」と読む）」といわれる託宣を観察することだったが、担当する堂主が身体上の不調で暫時休止中とのことであった。印象としてはかなり長い期間になっていると感じた。その代り「収驚（「シユウキヤン」と読む）」という呪術的な儀礼あるいは、実践を観察することはできた。また、台北でも大きな著名な廟なので、参拝者も多い。筆者の訪問の二日目（日曜日であった）には「進香団」が二つも来訪し、それぞれの童乩の様子を観察できた。

しかし、この様な、廟の及び廟での活動の内容の記述と考察は、稿を改めて書くことにせざるを得ない。ここでも金紙や金爐についてのみまとめる。

松山慈惠堂は、小高い山の途中の開けた場所にあり、廟の前の広場は駐車場としても、（進香団のような）諸行事の場としても使われている。広場の右隅には大きな三重の塔式の金爐がある。しかしこれは、明らかには使われていない。その代り、背後の山を切り開いた廟の敷地の縁



写真二

の部分に、銀色の大型の「環保金爐」が二基並んで設置されている（写真二）。そこに来訪者は各自金紙を運んでいって、炉に投入している。高い煙突からは、煙はさほど出ていない。たとえ出ていたとしても、背後の森の木立で、周囲に拡散することはなさそうだ。

香は、やはり一本に限ることになっている。香爐はあるが、大きなものは進香のためのものである。主殿の入り口の外と内にある。堂内が煙で満たされているようなことはなく、風通しの良い感じである。

### 4、台北市中山区 「行天宮」

行天宮は観光の名所としても、来訪者の多い廟としても著名なところである。筆者はこれまでさほど興味がわかず、訪れたことがなかった。

九月の訪台時に松山慈惠堂で「収驚」を観察し、廟の方から色々話を伺

った。その際、収驚に関しては行天宮が遙かに大がかりだから訪ねてみるとよいと教えられた。

松山慈惠堂からの帰路立ち寄って驚いた。三川門と正殿の間は広い空間になっているのだが、そこ一杯に人々が何列も列をなして立っている。列の先には正殿を背にして、青い長い僧衣とも中国風の服とも形容のしてみようのない服を、あたかも制服のように着た人がマスクをして、線香を一本手に持って、列の人々に相對している。青衣の人は全部で十人以上はいた。これらの人はボランティアで行天宮では「効勞生」と呼んでいる。次々と列の先頭から人が進み出て青衣の人の前に立つ。青衣は線香を相手の体の周りに振り回すようにして、なにやら儀礼的な所作をする。これが収驚である。一人当りせいぜい一、二分くらい、三分迄はかかっている。列の人はこのために一時間近く立ち続けているようだ。筆者はビデオを撮ろうとしたら、腰にトランシーバーをつけ巡回している廟の人らしい男に制止された。実は松山慈惠堂でも断られたので、何か収驚の記録をとられたくないのだろうかと訝しかった<sup>(5)</sup>。

玉置も指摘しているように、行天宮は二〇一四年に香爐を全廃し、線香も禁止したことで知られている。しかし、収驚をする人は線香を持っている。行天宮のこの空間は四周を廟の建物に囲まれているので、閉鎖的な環境になるのかも知れない。そのため収驚する人は香の煙の影響を強く受けるのかも知れない。収驚の「施術者」が皆揃ってマスクをつけているのはそのためであるようだ。

後にインターネットで調べたら、以前は施術者たちはマスクの他に「護

目鏡」(密閉度の高い防煙用ゴーグル)を掛けていたことが、ニュースになっていた。この日はさすがにゴーグルは着けていなかったが、術者の背後には大きな扇風機がいくつも置いてあって、風を送っていた。これは暑いからではなく、煙が籠もらないようにしているのであると、想像できた。ただ、これでは煙を列で並んでいる人たちに吹き付けることになるのではないかと思うのだが。

行天宮は社会福祉や教育など慈善活動に力を入れている所である。大きな総合病院も経営している。そういうことが、香煙などの健康への影響を警戒する姿勢につながっているのかも知れない。香爐だけではなく、金爐もない。金紙も廟内では扱っていない。恐らく廟の創建時(一九六七)からなかったのではないかと思うが、調べは付いていない。

この他にもユニークな特徴のある廟であるが、ここでは香と金紙のみに記述を限る。

##### 5、南投縣名間鄉「受天宮」

正式には松柏嶺受天宮という。台中市の隣の南投縣の山中にある、大きな著名な廟の一つである。ここには以前何回も台中市内から南投市を経由してバスで通って、童叢の觀察をしていたことがある。日本語を自由に話す藍水木先生が本殿の事務室におられ、廟のことなら何事についても気兼ねなく教えを請うことができたのは、台湾に通い始めて間もなかった筆者には、とても心強くありがたいことであった。

主神の玄天上帝の誕生日である旧曆(台湾では農曆という)三月三日

(二〇一八年では四月一八日)に向けて、旧正月明けくらいから、「進香団」が台湾全島からそれぞれの廟単位で来訪する。新暦だと例年大概二月末から四月中頃位の時期に当たるので、大学の春休みにかかる時期でもあり、これまでの筆者には都合がよかった。

進香団には必ず童乩が主導的な役割で参加している。一般信者の他にその廟で組織する獅子団とか、八家将<sup>⑤</sup>とかいろいろなグループが随行する。それらは廟前の広場で多彩なパフォーマンスを披露する。進香団の廟のこれらの関係者や、信者達や、おそらく同じ地域の人達も、ほとんど地域総出ではないかと思うくらいの人々が何台もの大型観光バスを連ねて、台北や高雄などの遠方からも参詣するのである。一団体でバス十数台、数百人の規模になるのは特に異例でもないことである。そのため廟の門前町の入り口あたりには、広い駐車場が設けられている。

童乩についてはここでは触れず、金爐・金紙、香爐・線香についてまとめる。

廟の出入り口前と廟内の神殿前にも大きな香爐があるので、参拝者を持つ線香も相まって、かつて通っていた時期には、辺りに香の煙が絶えなかった。一日廟にいて、宿舎に戻ると、衣服にも髪の毛にも香のにおいがしみこんでいた。今回は三月上旬から中旬の訪台時のごく初期に(懐かしさもあって)この廟を再訪したのだが、なぜかあまり人がいなかった。進香団の人々と共に、祭礼の雑踏の中にいるような感じの時に訪れることが多かったので、閑散とした雰囲気不思議な気がした<sup>⑥</sup>。香爐に香を挿す人もそう多くはなく、煙がしみて目が痛くなるようなことも

なかった。

本殿の前の広場の左隅に大きな金爐が前と同じくそびえている。六角形の三重の塔のような、壮麗な装飾を施した建築物である。以前は金爐の先端の煙突からは間断なく盛んに煙が上がり、夜には金紙が焼けて火の粉となって赤々と吹き出すのを見ることができた。山中の平らな開けた土地に廟は建てられている。廟の広場の前は断崖になっていて、目の前に濁水溪とそれが開いた平地を一望に収めることができる。周囲は森林があり廟の背後(南投から上ってくる丘陵)に茶畑が広がる。この様な立地から、少しくらい煙が出ても火の粉が飛んでも特に問題になるようなどころではない。

三〇年以上経て今回再訪してみても基本的に廟の印象は変わらない。廟内の様子、廟前の広場もさほど変わりなくほぼ同じで、金爐も同じ場所に建っている。しかし、時間の経過のために、顔見知りの人々は当然いない。廟にいる人たちには日本語も英語も通じなかった。

金爐については、一見してその時は気が付かなかったが、改修されて新しくなっていることが後に判明した。帰国後このときの写真を詳しく調べて、違いに気が付いた。三重の塔様の建物の最上部には裝飾のある煙突ではなく、金属製の、塗装のない太筒が伸びていて、その頭部には排煙器らしいものが載せられている(写真三)。この部分は古い蒸気機関車の煙突のような形である。インターネットで調べてみると、一九九九年に南投縣一帯が大地震に襲われ、廟の金爐も外装と内部に損傷を受けた。その時は使用上の安全には問題ないとされたようだが、建造後四



写真三

○年ほど経っていたので、再建した。この立て替は二〇一三年九月である。政府の環境保護の指導は既になされていたはずなので、恐らくそれに従って「環保金爐」にしたものである。他の都市部の廟のように、金爐の脇に浄化装置を設置する様な大がかりなものではなく、吸気量を増やし燃焼温度を上げて完全燃焼するように配慮し、煙と煤塵が飛散しないような排煙装置にした程度のもだろう。筆者の再訪時も廟の人らしい男性と参詣客らしい男性が数人金紙を焼いていたが、煙などは見えなかった。廟の人らしい人は足許に金紙を詰めた大きな樹脂製の箱二つを置き、そこから次々投入していた。

しかし、それ以外のところは、特に環境保護を意識しているようではない。廟内の売店で金紙も線香も各種多量に売っているし、香爐にも沢山線香は挿されている。金爐でも特に人々が金紙を少なくしているよう

にも見えない。拝拝の時も一本ではなく何本も線香を点してお参りしている。

受天宮のような、郊外の自然豊かなところの廟では、特に「減金」「減香」に神経質になっている風はない。事務所も含めて見て回ったが、他の（次に述べる台南の開基天壇のように）色々注意書きが貼り出されていたりもしていない。しかし、大挙して進香団などの参詣者が来ていたとしたらどのような光景になるのか、それも三〇年前と変わらない様子なのか、観察することができなかった。何とも言えない気がする。

## 6、彰化縣鹿港「城隍廟」

次の媽祖廟（正式には鹿港天皇帝）に行く途中で、見かけた廟で、事前には何も知らなかった。媽祖廟のすぐ隣のブロックにあり、距離的には徒歩四、五分と聞いていくくらい近くにある。城隍廟の本体に行く前に大きな高い煙突が目に入り、金爐とすぐ分かったので写真を撮った。城隍廟には古い金爐と最新式と思われる「環保金爐」があるようだ。旧の方は投入口に南京錠が掛けられ「封爐」されている。廟の辺りは路が狭く、建物も密集していて、裏に回り込んで眺めたり俯瞰したりは（台北の城隍廟と同じく）難しい。最初に目に付いた高い煙突の金爐は旧い方のものらしい。新しい環保金爐は煙突などよく確認できないが、「環保金紙」として認定されているような精製された金紙を投入するように、注意書きが、投入口の脇にある金属製パネルに表示されている（写真四・五）。パネルの注意書きを見る限り来訪者が各自で投入してよいようだ。



写真五



写真四

この爐は廟の境内にあるのではなく路に面して（と言うより道端に）ある。金爐が境内とは別のところにあるのは、隣天后宮すなわち媽祖廟も同じである。

香爐については、廟の中を見ているので、調査落ちであり、報告できない。

#### 7、彰化縣鹿港「天后宮（媽祖廟）」

正式には天后宮なのであるが、鹿港の媽祖廟の方が通りが良い感じがする。城隍廟を通して、媽祖廟への狭い道を行くと少し広い広場に出て、その（来た道から見ても）右脇に門があり、本殿につながっている。入ってゆくと敷地は意外と広く、立派な廟がそびえている。ここは、先に記述した南投縣の受天宮と同じように、年明けから主神媽祖の誕生日（旧曆三月二三日）まで台湾全島から進香団が集まる所としてよく知られている。当然童乩も多数来廟するので、是非観察したいと思っていたのだが、これまでなぜか機会がなかった。（鹿港の狭い道にひしめくように詰めかけている進香団の混雑ぶりを、写真で見たり人から聞いたりして怖じ気づいた面もある。）

筆者が訪れた日は特に何か催事がある日ではなかったが、門前通り一帯も廟の中も本当に多くの人が居た。参詣者の数は確かに台湾でも有数の廟であると感ずる。

香と金紙について述べる。三川門と正殿の間の広場に大きな香爐があり、盛んに煙を上げている。人々は一つかみといいたくなるほど何本も線香を持って爐の周りに来ている。廟内の柱に「鹿港天后宮点香参拝順序」と貼り紙がしてあり、五方所の五神明に対してそれぞれ「三柱香」をあげてお参りする様に指示されている。計十五本であるから一つかみの量になる。それらの香に点火するためのガスバーナー（一台の器具に三口のバーナーが付いていて、台が赤く塗られているものが、大抵大きな廟には備えられている。）で、点火している人たちもやはりまとめて



何本も点火している。それを持って順次指示された神明を参拝していくようだ。しかし「一香爐一神明一柱香」という政府の推奨する「減香」は、ここでは廟自身が勧めてはいないようだ。

金爐についていえば、立地の点でさすがに廟内の金爐は使うことができないようだ。周囲は廟の敷地に接して様々な建物が密集している。少し離れた空き地を駐車場として使用しているらしい。道路標識にも「天后宮停車場」（「停車場」は「駐車場」のことである）と出ている。その隅の一面に三重の塔式の金爐が作られている（写真六）。

廟内の（旧い）爐は、壁面には大きく「金爐」と赤字で書かれたパネルが貼られているが、投入口に門が掛けられている。しかしその前に大きなプラスチックのゴミ袋（日本のゴミ回収用の四五ないし五〇立米くらいの袋とほぼ同じくらいの大きさ。但し半透明で薄黄色もしくは薄び



写真六

ンクのもの）を金属のフレームで袋の口を広げて支えたものがいくつも並べて置いてある。人々はそこに金紙を入れている。金紙の大きな箱ごと、金属フレームの上に置いてあるものもある。そのゴミ袋が並んでいる場所の壁には大きく金爐と書いた紙が貼ってあり、そこに朱で強調して「本宮金紙統一送至停車場環保金爐焚化」と書かれている。わざわざ先に触れた駐車場隅の環保金爐まで廟から運ぶらしい。確かに環保金爐本体の壁面の脇には先ほどのゴミ袋が五、六〇ほど積み上げられていた。また、筆者が見たときには、爐に火は入っていないかった。

環保金爐としては、大がかりな方ではないかと思う。塔の先端の煙突の部分から金属製のパイプが横に伸び、それが曲がって下に導かれ、同じく金属製の太い筒状の構造物につながっている。隣の三重の塔式の金爐の二階の高さくらいの所から、太い煙突が伸びている。隣の金爐よりもこの煙突の方が高い。この金属製の太い筒状の構造物が隣の金爐から出る排煙を浄化するのであるかと想像するが、筆者には構造はよく分からない。

鹿港の天后宮は、環保金爐は備えていても、参詣者の金紙自体を減らすとか、隣の城隍廟の爐のように、品質の高い金紙のみを認めるとかの配慮は、廟の姿勢としては、掲示などから判断する限り、特になされていないように思われる。また、先ほどの香についても、減らす姿勢は特に見られない。尤も、これだけ人が集まれば、余り意味が無いような気もするし、しかし、「塵も積もれば山となる」の諺の逆の意味で、少しでも減らせば総量としては削減効果が上がるといふ論理も成り立ちそう

に思うし、実態はよく分からない。

## 8、台南市中西区「台湾主廟天壇」

普通は天壇で通っている。ここは台南にある国立成功大学の台湾現代史の教授であった陳梅卿氏から午前中は収驚を必ずやっている廟として教わったので、(三月にも来たことはあったのだが、午後だったから気が付かなかったのかも知れない) 九月来訪時に行ってみた。しかし収驚の気配はなく、正殿で道士らが儀礼を行っていた。内容は却って本稿の主題に関わるものであったので、それはそれで有益であった。

儀礼というか式典の趣旨は、台南市で紙銭を減らすために、(市の焼却炉などに) 集中して焼却することで大きな成果とメリットがあったことを祝うものであった。式次第は入念で午前九時から正午まで続く。参加者は廟関係者と共に行政関係者もいたようだ。

このことから天壇は積極的に減金に取り組んでいるのかと思ったが、しかし腑に落ちないことがある。天壇の隣に軒を接しているのか、むしろ一体のもののようにして、「武聖殿」という廟がある。調べても詳しくは分からないのだが、天壇はいくつかの廟が同じ敷地にある、複合体のような感じの所であるようだ。左隣にある武聖殿には三重の塔式の金爐がある。そこでは盛んに焼却をしている。金爐は「環保金爐」か、筆者には見ただけでは分からない。狭い敷地で、周囲の道も狭いので、全貌を見ることができないのである。

武聖殿の金爐の入り口の扉には「天公金爐」と掲示板が出ている。天

公とは天壇のことである。天壇の金爐でもあるということなのだろうか。実際、天壇の参詣者も金紙を武聖殿の爐に持って来る。

武聖殿の爐の焼却は間断なく勢いよく行われている。爐を扱う当番の者の名札も釘に掛けて掲示されている(交代制であるからであろう)。三月に来たときにはその時の担当者の一人が灰まみれになって、髪も顔も白くて素顔が分からないぐらいになっていた。灰神楽から現れた灰男かと思いたくなるほどであった。

こういう所と一体となって爐が運営されている廟で、金紙の集中焼却で大きな成果があったと祝っているのは、その事情が(あるいは神経が)筆者にはよく分からない。

## 9、台南市北区「玉皇宮」

正式には「台南開基玉皇宮」という。大きな道から離れて、とても細い道を入って行く所であり、分かりにくい。大きな門が、離れた広い道から入ってくる所に立っているが、そこからでも随分歩く。よく知っている人でないと分からない場合や、行くまでの道路事情で往生する場合もあるようだ。陳梅卿氏が、地図を書いて詳細な注意書きを添えてくれたので、タクシーの運転手に見せて困難なく行くことができた。

ここは「改運儀礼」を行う所として有名であるようだ。収驚は子供の夜泣きとか、大人でも心身の不具合の場合に、いわば邪を払う儀礼として行う、比較的簡易なものである。これに対して改運儀礼は、筆者は初めて目にしたのだが、法師が手の込んだ道具立てで行う、時間もかかる

儀礼である。儀礼を見ているの印象は、人が何か人生において順調でない状態の時に、それを転換することを目的とするものであるようだが、全て同じ手順で行っているのか、それぞれの人においてどのような問題があつて儀礼を行っているのか、外から見ただけでは分からない。これについては別稿での考察にせざるを得ない。

何人もの法師が改運儀礼をそれぞれ行っている他、進香団も来廟していたし、輦轎（小型の一人持ちの木製の椅子で、神が座るものとされてゐる。これを手にして、椅子の脚を筆のように使い、託宣を行うタイプの童乩がいる）を持って何か机上に書き、それを取り囲んで話し合っているグループもいるし、来廟者の若者がトランス状態になつて童乩のように飛び跳ね始めたりもしたし、とにかく人が多く、喧噪に包まれた廟である。当然線香の煙も立ち込めている。

金紙については、興味深いことがあつた。改運儀礼（もしくは収驚）と思われるものを受けていた比較的若い女性は、上衣を広げて捧げ持つて法師に相対していたが、法師は鞭の把手をその服に向けて、繰り返し何か呪言と思われるものを唱えつつ、把手を服のあちこちに触れるような、あるいは刺すような動作をしていた。筆者が他の人たちに注意を向けていたかなりの時間、その女性は何か枚ものシャツや上着類を出して、同じように法師から呪術的な身振りを受けていた。最後にその女性を見たのは、廟の物置のような所で、黙々と金紙の束をほぐして、焼却用のゴミ袋のような半透明のビニール袋に入れていた所だった。その量はビニール袋何枚分になるのか分からないくらいであつた。女性の足許にま

さに山と積まれている。これが皆お金を出して買った金紙であるとするならば、ずいぶんの金額になるのではないかと思われた。明らかにこの廟で焼くためではなく、市の集中焼却炉に出すためのものと思われる。

この廟からの細い道が、離れた広い道に出るところの角に大きな金爐が立っていた。三重の塔式の金爐につなげた、ボイラーのような形の太い構造物（浄化装置なのかと思う）と、そこから高く立つ金属製の煙突を持つ、かなり大がかりな爐である。この隣に何か廟のような屋根が見えるので、別の廟かとも思うが、調べてもこの辺に他の廟はない。恐らく玉皇宮の金爐であろう。そうであると、ここは少なくとも休止状態になつていられると思われる。全体が屏や柵で囲まれている上に、広い道に面した出入り口らしいところも閉ざされて人の出入りの気配がない。廟本体の異様なまでの活気というか熱気と、廃工場のようなさびれた雰囲気との対照が不気味であつた。

## 六、まとめ

これまでの記述の範囲内では、「環保祭祀」に関し、次の諸点は確認できない指摘できる。

- ①、大都市の、それも人口密集地帯に設置されている廟では、「環保祭祀」は浸透している。
- ②、地方の、それも山間部にあるような廟では、さほど神経質な対応をしていない。
- ③、「環保祭祀」は信者の信仰心にはさほど影響を及ぼしていない。

行政の推奨する代替え方などにこだわらず、金紙の代りの花籠の寄進など、自発的に神への表現を行っている。

④、集中焼却方式も浸透しているが、その場合、金紙の減量になっているのか疑問が生じる。

これまでの経験に比べ、人々の様子に感じた変化は、次のようなことだ。しかし、これらを十分議論するのは、次の機会にせざるを得ないので、「今後の課題」として記しておきたい。

①、来廟している女性たちの年齢層について、若い人が増えたと感じる。以前は中年以上の主婦層と覚しき人たちが中心で、男性や若い女性らは妻や母に相当する中年女性に連れられてきている感じがあった。

②、若い女性たちは、ボーイフレンド、恋人と覚しき人たちと、あるいは若い女性たち同士でも気軽に訪ねてきている。デートスポットの一つなのではないかと思うくらいだった。しかし、神明にたいする時の態度、例えば筈を投じているときなどは、とても真剣である。

③、中年女性たちは、昔は暗く苦しそうな表情で廟に来ている人が多かった印象がある。今回はそういう人は少なく、明るい、あるいは平穏な感じがする。この変化は、台湾の人たちの見解も参考にすると、国民全体に適用される健康保険が運用されるようになったことと関連している可能性がある。

④、前記③に関係するかも知れないが、来廟者の神に対する相談内容では、病気の相談は相対的に減ってきているようだ。何が一番の関心事

なのかは、もう少し情報を集めたい。

## 謝辞

二回の台湾出張を可能にしてくれた。大学当局に深く感謝したい。本稿はその研究成果の一部である。

台湾で今回も支援してくれた、成功大学元教授陳梅卿先生と、高雄医学院（医科大学）元教授文榮光先生には、これまでに本当にお世話になった。厚くお礼を申し上げたい。その他にも、台湾での調査研究を指導してくださった、台湾大学医学院附設医院精神科教授故林憲先生、受天宮の藍水木先生にもここで衷心よりの感謝を捧げたい。

## 注

(1) 藤崎康彦 一九九一「童乩」植松明石編 一九九一「神々の祭祀」凱風社所収

(2) Wilbert, Johannes 1987, *Tobacco and Shamanism in South America*, Yale University Press

(3) 金紙をコーン型に丸めたものに火をつけて、室内の隅々で振ることも、童乩などはよくやる。

(4) かつて廟でこの様な祭礼を観察していたときに、若者や壮年の男たちが、トランス状態で童乩の所作を行い始めるのは何例も観察した。また今回台南の「玉皇宮」においても、若い男が同様になったのを目の前で目撃した。

(5) インターネットで「台北 行天宮」をキーワードにして、動画検索をする

と、収驚の場面を含むものがヒットする。

(6) 加藤敬 一九九〇a、参照

(7) 進香団は事前に廟に何月何日(旧暦の日付)に何人の団員で来廟する、と通知をする。通知を受けた廟は、黄色い短冊形の紙にそれら要項を事務所のある建物の壁に貼り出す。勿論何地方の何廟という進香団の名は先頭に表示されている、今回それを写真に撮ってあったので点検すると、特定の日に進香団は集中していることが分かる。貼り出された紙の範囲では旧暦の正月(一月)十六、十七及び二十三、二十四が圧倒的に多い。例えば十七日は二十二組、二十四日は二十四組の進香団が来訪する。それらを新暦の曜日に当てはめると土曜日と日曜日である。十七日も二十四日も日曜日である。それ以外の月曜日や火曜日など平日は数組しかない。筆者は新暦三月十二日月曜午後訪問したのだが、この日(旧暦正月二十五日)の登録は確認できる限り四組しかない。筆者の居た間、進香団の何か演技を担当するらしい若者が五、六人広場にいただけで、進香団本体は一組も見かけなかった。掲示には到着時間までは書いてないので、進香団は既に去ったのか、これから来るのかは分からない。以前藍水木先生から伺ったところでは、廟の童乩が日や時間などを神の指示として受けて信者を率いてくるとのことだったが、参加者の都合が優先されるようになったのであろうことが読み取れる。参加者の都合や勤務などを配慮して、様々な儀礼、行事などでも土日に行くことが多い傾向は、他の寺廟においても顕著であることが今回の調査で明らかになった。

ちなみにこの日に貼り出されていた進香団の要項から見ると、一番多い参加者の団体は四百六十人で、一番遠くから来ている団体は花蓮縣からであった。花蓮縣は東海岸なので、かなり遠い。場所によっては、また、童乩が神から指示された時間によっては、廟で泊まる必要も生じるので、廟の宿泊施設も用意されている。

(8) 排気の温度を下げるものかも知れない

#### 参考文献

- 加藤 敬 一九九〇a 『童乩』 平河出版社  
 加藤 敬 一九九〇b 『拝拝』 平河出版社  
 蘇 素卿 一九九九 『台湾漢族における祭祀活動と紙製品の研究—主に金銀紙を中心として—』 『比較民俗研究』 16 四七頁—一〇四頁  
 玉置充子 二〇一八 『台湾における『伝統的宗教文化』の社会的位置付け—「エコ祭祀」政策をめぐる寺廟の抗議運動からの考察』 『拓殖大学台湾研究』 2 二三頁—五〇頁